Akita University

継承的アーカイブの活用と「次世代の平和教育」の展開†
－広島「平和教育プログラム」の実践－

外池　　智*
秋田大学教育文化学部

本研究は，2009年度から推進している戦争遺跡に関する研究[1]，2012年度から推進している戦争体験「語り」の継承に関する研究[2]の継続研究であり，特に継承的アーカイブを活用した「次世代の平和教育」の構築に関する研究[3]の一端を発表するものである．

戦後70年の歳月が経ち，戦争体験を語れる終戦時の年齢を仮に10歳とすれば，もはやその人口は全人口の８％となった．こうした状況の中，その貴重な「語り」を多様な方法でアーカイブする試みが進められており，またモノの継承として戦争遺跡や遺物のアーカイブも進められている．さらに，学校教育においても，もはや直接的な戦争体験の「語り」ではなく，継承的アーカイブを活用したいわば「次世代の平和教育[4]」と呼ぶべき実践が，刻々と展開されている．

本研究では，こうした取り組みの内，2011（平成23）年度から取り組まれている同じ広島の「平和教育プログラム」の実践として，今年度の広島市教育センター研修「平和教育研修（平和教育プログラム実践の充実）」の内，川内小学校の実践を取り上げ，検討していきたい．

キーワード：継承的アーカイブ，「次世代の平和教育」，広島「平和教育プログラム」

1.「平和教育プログラム」の概要[5]

広島市による「平和教育プログラム」は，2011（平成23）年より2013（平成25）年の３年計画で進められ，計画年度の最終年度に当たる2013（平成25）年度からは広島市内の全ての小・中・高・特支での展開が推奨されている．また，現在実施されている「平和教育」の教員研修も，基本的にはこのプロジェクトの継続的展開として実施されている．

このプロジェクト実施の契機は，「広島市立学校『平和教育プログラム』指導資料」の「策定の趣旨・背景」において，「(1) これまでの取組」，「(2) 平和に関する意識実態調査等の主な結果」，そして「(3) 新学習指導要領等への対応」の３点から述べられている[6]．

プロジェクトの進め方は，まず2011（平成23）年度に委員会において「平和教育プログラム（試案）」を作成し，次の2012（平成24）年度にモデル校においてその実践を試みた後，改めて「平和教育プログラム」を策定するといったものであった．実践的開発を目指していたことがわかる．

そして，この３年間のプロジェクトの結果として，小学校から高等学校までの12年間を見通したカリキュラムの構築，計４冊の指導資料の作成，そして授業実践の提起を行っている．（資料１参照）

こうした「平和教育プログラム」について，その特色としては以下の4点を指摘した[7]．

①小・中・高の12年間の平和教育を想定し，発達段階に応じた体系的カリキュラムを構築したこと．
②ある特化した時間を創設するより，既定の教

2015年12月17日受理
† Leveraging inherit a archive and peace education of the next generation of －Practice of Hiroshima Peace education program:
* Satoshi Tonoike, Faculty of Education and Human Studies, Akita University

科を活かしたカリキュラムを構築したこと.

③小・中・高校に応じた「平和教育ノート」といった共通教材を作成し活用していること.

④これまでの平和教育の目標など基本的路線は踏襲しつつ，復興過程やこれからの平和など未来志向,「持続可能な社会」といった新しい視点も取り入れたこと.

2.「平和教育プログラム」の実践的展開

⑴　今年度広島市「平和教育研修」の概要

「平和教育プログラム」は前述の様に，現在広島市の全ての学校で展開が推奨されているが，ここでは今年度の教員研修での事例を取り上げたい.

広島市の2015（平成27）年度の教員研修では,「対象者全員が受講する研修」として「初任者研修」「10年経験者研修」等39件,「推薦により受講する研修」として「主幹教諭研修」「教務主任研修」等７件,「申込みにより受講する研修」として「子どもの理解研修Ⅰ（いじめへの対応)」「小学校社会科授業づくり研修（思考力・判断力・表現力の育成をめざした授業づくり)」等59件，合計105件の研修を開設している.

「平和教育研修」はこの内の「申込みにより受講する研修」として開設されている．日程は２日間で，第１日目は６月22日（月）に川内小学校で，第２日目は９月10日（木）に広島市教育センターにおいて，ともに半日をかけて実施されている．当日の日程は，資料２の通りである.

⑵　実際の授業について

①今回の授業「せんそうがあったころの広島」（道徳）の位置付け

昨年６月22日（月）に川内小学校で実施された授業は，第３学年５組（男子14名，女子17名，計31名）の道徳の授業として実施され，筆者も参加させていただいた.

まずこの授業の位置付けを確認したい．前述した様に，この広島市「平和教育プログラム」は小学校から高等学校までの12年間を見越したプログラムとして開発された（資料１，資料３参照）．12年間は，３学年ずつでまず４つのプログラムで構成されている．すなわち，プログラム１（小学１～３）は「被曝の実相に触れ，生命の尊さや人間愛に気付く」，プログラム２（小学４～６）は「被爆の実相や復興の過程を理解する」，プログラム３（中学校）は「世界平和にかかわる問題を考察する」，そしてプログラム４（高等学校）は「世界平和の実現を展望する」である.

当該授業は，小学校３年生であるのでプログラム１（小学１～３）は「被曝の実相に触れ，生命の尊さや人間愛に気付く」に該当する．次に，このプログラムⅠはさらに３つの「単元」で構成されている．すなわち，単元１（１学年)「みんなのたからもの」，単元２（２学年)「みんな生きている」，単元３（３学年)「せんそうがあったころの広島」である.

３学年の「せんそうがあったころの広島」は，さらに３つの「学習」で構成されている．すなわち,「学習１：気付く　子どもたちのくらし～今と昔～」（社会),「学習２：考える　家族のきずな」（道徳),「学習３：伝える　引きさかれる家族」（道徳）である.

今回の授業は，この「学習２：考える　家族のきずな」（道徳）に該当する.「学習１：気付く」の社会科「子どもたちのくらし～今と昔～」の学習を受け,「家族のきずな」を「考える」ことを主眼とする授業として構成されている.

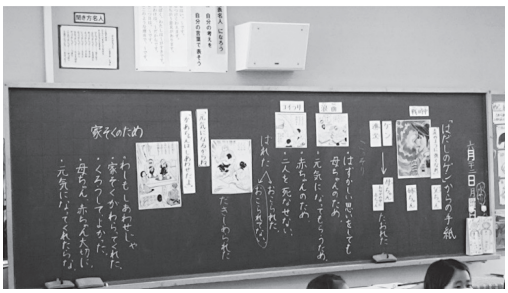
②授業の実際

本時の指導案は，資料４の通りである.「本時のねらい」は,「戦争中，家族で助け合い，家族のために自分にできることを懸命に行うゲンの気持ちを考えることを通して，家族の一員として自分にできることをし，協力し合って楽しい家族をつくろうとする心情を育てる」であり,「ゲンの気持ち」の考察，自分の家族への「心情を育てる」ことをねらいとしている.

授業の基本的構成は，以下の通りである.

導入		1. 前時を振り返る
		2.「麦」について知る
展開	前段	3. ゲンの気持ちを考えながら，資料「『はだしのゲン』からの手紙(1)」を読む
		4. お母さんが倒れた時のゲンの思いを考える
		5.「浪曲」を家族に見せた時のゲンの気持ちを考える
	後段	6. 自分について振り返る
終末		7. 教師の説話を聞く

授業の概略として，「はだしのゲン」のエピソードを題材にしながら，母が倒れた場面，浪曲や鯉釣りがばれた場面など，その時々のゲンの気持ちを考えながら，展開前段で『へいわノート』に沿って「家族に『浪曲』を見せながら，ゲンはどのようなことを思ったでしょうか」を記入していく．後段では，これを踏まえて自分自身の家族との出来事を振り返り，最後に「教師の説話を聞く」構成になっている．「はだしのゲン」のエピソードは，この「平和教育プログラム」のプロジェクトで作成された『小学校1・2・3年　ひろしま　へいわノート～いのち・しぜん・きずな～[8]』掲載のものである（資料5参照）．最後の「教師の説話」は，授業者自身が高校生の頃に父親が交通事故に会った時の話で，いつも普通にいるはずの家族の姿が身に染みてありがたく感じたエピソードであった．



③実践から見えてきた課題

さて，実際の授業を参観させていただいて，以下の4点を指摘したい．

まず，マンガを活用した平和教育についてである．賛否が分かれる点であろうが，これまでも原爆を取り上げた優れた作品として「はだしのゲン」を題材にした平和教育は数々実践されてきた．しかし，それはやはり個人の意欲的な授業者の取り組みであり，ある先進的な実践者が個別に取り組んだものであった．しかし，今回の場合は，「平和教育プログラム」として広島市教育委員会といったいわば公的組織が戦後70年を見越して取り組んだプロジェクトであり，現在は広島市の小・中・高・特支の全学校において，その実施を推奨し，さらには，今回のように広島市教育員会主催による教員研修の「平和教育」においても取り上げられている事業である．そこに，マンガが教材として正式に取り上げられたのである．その意味では画期的といえよう．ちなみに，この「はだしのゲン」は，同じ3年生のこの学習2に続く「学習3：伝える　引きさかれる家族」（道徳）でも取り上げられ，さらに，高等学校の「単元10　ヒロシマ」の「学習1：情報整理　平和とは何か」で一部分，「学習3：発信する　被爆体験者が伝えること～中沢啓治さんからのメッセージ～」でも取り上げられている．

一方，これに関連して指摘したいのは，フィクション性についてである．「はだしのゲン」は確かに優れた作品であり，その内容は作者である中沢啓治氏の実体験がベースとなっている．しかし，作品はやはり創作されたものであり，事実に基づいた事象ではない．今回の授業は道徳であるので，当然ながら題材は必ずしも現実の社会的事象や史実に基づくものでなくてもよいのであろう．しかし，筆者がやはり社会科教育を基盤としているせいか，取り上げる題材がマンガであれば，それを裏打ちするような実際の社会的事象を示す工夫が必要であると考える．継承的アーカイブとの関連でいえば，この授業に関しては，全く活用されていないのである．

加えて，授業後に川内小学校長である山田明美氏に，今回の授業についての感想を伺った時の指摘である．やはり小学校3年生には「はだしのゲン」は難しいのではないかとの指摘があった．「はだしのゲン」という作品に対しての個々人の捉え方もあろうが，山田校長によれば，「はだしのゲン」は優れ

Akita University

た作品ではあるが，その背景には作者である中沢氏の思想や心情が基盤となっている．そうした，いわば深い読解が必要とされる作品は，小学校３年生という学齢には難しいのではないかとの指摘である．

最後に，今回の授業は，果たして平和教育なのか家族の在り方の教育なのかについてである．すなわち，今回の授業では，元来体系的に構成されているはずの平和教育あるいは戦争学習のコンテキストは薄れ，むしろ家族愛や自身の家族における役割について考えることが中心になっていた．本授業では，確かに戦時中の家族の在り方が題材として取り上げられている．しかし，そこには「戦争中で大変だった」「原爆が投下されて大変だった」との漠然とした社会や生活の困窮さが背景にあるだけで，肝心の「戦争」や「原爆」といった事象に対する学習は構成されていない．むしろ，そうした「大変な状況における家族愛」や家族それぞれの役割，家族への思い，気持ちが中心的に取り上げられ，子ども達もそれについて，十分な思考を巡らせていく活動が中心に構成されていた．そうなると，これは「家族」の授業であり，平和教育の授業として成立し得るのかといった根本的な疑問が残る．前述した様に，この「平和教育プログラム」は，小学校から高等学校までの12年間を体系的に構成した点に特色がある．しかし，個別の授業として実践した時に，その全体として見通した目標をどう構成し実践していくのかは，まさにこれからの課題であろう．

3. 結語ー「伝える」ことと「教える」ことー

以上，本研究では，2011（平成23）年度から取り組まれている同じ広島の「平和教育プログラム」の実践として，今年度の広島市教育センター研修「平和教育研修（平和教育プログラム実践の充実）」の内，川内小学校の実践を取り上げ，検討していきた．

こうした「次世代の平和教育」の実践が進む一方で，戦争遺跡や戦争体験「語り」のアーカイブも多様な取り組みが進められている．例えば，2012年度から推進している戦争体験「語り」の継承に関する研究[9]で取り上げたように，この同じ広島市を舞台にして，「被爆体験伝承者」養成プロジェクトが進行している．第一期生は，予定の３年間の養成期間を経て，晴れて昨年３月に修了し，広島市より正式に「被爆体験伝承者」として認定された．第一期生の修了者は，当初の申込者137名に対し51人（修了達成率37.2％）であった．修了生達は，その後公益財団法人広島平和文化センターから正式に委嘱を受け，「語り」の活動を４月から展開している．その内のお一人である髙岡昌裕氏を７月に秋田にお呼びし，彼自身初めてとなる継承者としての「語り」を実施してもらった[10]．

こうした取り組みは，いわば「伝える」取り組みである．その一方で，「次世代の平和教育」は，まさに「教える」取り組みといえる．すなわち，戦争遺跡のアーカイブにしろ，戦争体験の「語り」の継承にしろ，これらの取り組みは，その形状や遺構，証言による事実や思いをいかに正確に伝え継承するかが「継承的アーカイブ」の試みである．それに対して，これらの継承的アーカイブを教育の文脈に構成し，その在り方を問い続けていくのが「次世代の平和教育」の試みである．基本的に，前者は「伝える」行為に力点を置くがゆえに，そこに教育の文脈はない．しかし，その試みは受け手に対して，気付き，心から湧き上がるもの，価値の変容や形成を期するものである．これは，「平和教育」を鑑みる時，改めてその在り方を問う視点であろう．すなわち，「平和」は教え込むものではなく，やはりその本人が自主的に気付き，目覚め，湧き上がるものではないかということである[11]．両者の取り組みは，当然のことながら密接に関連している．今後の連携にも注目していきたい．

---

[1] 2009-2011年度科学研究費補助金基盤研究（C）「地域における戦争遺跡の複合的・総合的アーカイブと学習材としての活用」.

[2] 2012-2014年度科学研究費補助金基盤研究（C）「戦争体験『語り』の継承カリキュラムの開発と学習材としての活用」.

[3] 2015-2017年度科学研究費補助金基盤研究（C）「継承的アーカイブの活用と『次世代の平和教育』の構築」.

[4] 「次世代の平和教育」については，昨年度日本社会科教育学会第64回全国研究大会（静岡大会）自由研究発表「教員研修における平和教育－広島市，長崎市，那覇市の取り組みを事例として－」，また論文としても同名のタイトルで秋田大学教育文化学部編集委員会編『秋田大学教育文化学部研究紀要　教育科学』第70集，（秋田大学教育文化学部，2015年３月），1-18頁にまとめている．その特色

Akita University

として，以下３点を指摘した．

（1）継承的アーカイブの活用

（2）戦後の平和希求活動への着眼

（3）目的的平和教育から方法的平和教育へ

[5] この広島市の取り組みについては，前掲４註の学会・紀要で報告している．

[6] 広島市教育委員会学校教育部指導第二課編「広島市立学校『平和教育プログラム』指導資料」（広島市教育委員会学校教育部指導第二課広島市教育委員会学校教育部指導第二課，2014年３月），２頁参照．

[7] 前掲註４参照．

[8] 広島市教育委員会編『小学校１・２・３年　ひろしま　へいわノート～いのち･しぜん･きずな～』(広島市教育委員会，2013年３月)，全29頁．

[9] 前掲註２参照．

[10] この内容は，今年度日本社会科教育学会第65回全国研究大会（宮城大会）自由研究発表「継承的アーカイブの活用と『次世代の平和教育』の展開－広島『被爆体験伝承者』のデビューと『平和教育プログラム』の実践－」として報告している．また論文としても「戦争体験『語り』の継承とアーカイブ（3)」のタイトルで秋田大学教育文化学部編集委員会編『秋田大学教育文化学部研究紀要　教育科学』第71集，（秋田大学教育文化学部，2016年３月）としてまとめてある．

[11] これは，今年取り組んだ「むのたけじ氏の授業」の取材時のむの氏の発言の影響も受けている．むの氏に道徳教育の教科化についてどう思うか尋ねたところ，「道徳って教えるものですか？道徳って目覚めるものじゃないんですか」とお答えになったことが，非常に印象的に残っている．

Summary

This study is in published studies on the construction of the next generation of peace education is continuing research studies on the inheritance of war has promoted research on war-related sites are promoted from the2009 fiscal year, 2012 year telling, especially by using the hierarchical archive.

Talk about the experience of war, after the war 70 years has passed since World War II at the age if 10 -year-old, no longer its population total population 8%. Is conducting a trial in these circumstances, the precious "narrative" to archive in a variety of ways, also things as a succession of archives of war relics are also underway. Practice should be called "peace education of the next generation", so to speak, in school, no longer talk of a direct war experience, but by using the hierarchical archive is ever-changing and expanded.

Featured Kawauchi elementary school students in Hiroshima City Training Center for this year's peace education training（improvement of the peace education program）as a peace education program, in Hiroshima in this study, has been approached from the fiscal year2011（Heisei 23）efforts in the practice, you want to consider.

Key Words : inheritance of archives, peace education of the next generation, Hiroshima Peace education program

（Received December 17, 2015）

Akita University

広島市教育委員会学校教育部指導第一課・指導第二課

【資料１】　学校における平和教育の推進　～平和教育プログラムを基軸として～

平和教育の目標

ヒロシマの被爆を原点として、生命の尊重と一人一人の人間の尊厳を理解させ、国際平和文化都市の一員として、世界恒久平和の実現に貢献する意欲や態度を育成する。

平和教育の取組

◇ 被爆体験を聴く会
◇ 平和を考える集い
◇ 平和記念資料館の見学
◇ 平和交流
◇ 碑めぐり、折り鶴献納
◇ 慰霊祭(平和記念公園及び地域)
◇ 絵画・演劇・スピーチ等による発信　など
◆ こどもピースサミット
◆ ひろしま子ども平和の集い

現状と課題

【現状】
○　被爆に関する基本的な知識・理解が低下傾向にある。
○　平和な社会を創るために「大切な事」と思う事柄でも、自ら行動するほどに意欲は高まっていない。
○　平和教育について、「よいこと」「大切なこと」とする肯定的なものより、「受け身的、一面的」という否定的イメージが多い。
○　校種間の十分な連携が図られていない。

【課題】
○　被爆の実相等の事実を確かに継承できる知識・能力等を身に付けさせる必要がある。
○　実相等の事実を通して考え、主体的に行動することができる児童生徒を育成する必要がある。
○　広島市の児童生徒が共通に学ぶべき内容を体系化する必要がある。

「平和に関する意識実態調査(H23.3)」等より

学校の主な取組

小学校

・被爆体験を聴く会　・平和を考える集い
・被爆樹木の見学　・読み聞かせ、ビデオ視聴
・大きな絵の作成　・折り鶴の昇華活動
・ピースキャンドルの作成　など

中学校

・被爆体験を聴く会
・平和を考える集い
・折り鶴の昇華活動
・碑めぐり　など

高等学校

・被爆体験を聴く会
・平和を考える集い
・平和交流
・慰霊祭
・ピースデパート
・絵画・演劇　など

小学校から高等学校までの１２年間を見通した指導内容の体系化

平和教育プログラム

【策定の基本方針】
★　学習指導要領に基づき、発達段階に即した目標、内容の設定及び教科等を関連させた教材の作成
★　原爆による惨禍の事実とともに、市民が平和への願いや希望をもち、広島市の復興等に寄与してきた事実を併せた内容で構成
★　体験的な学習や基礎的・基本的な知識及び技能を活用した学習、児童生徒の興味・関心を生かした自主的・自発的な学習の重視
【参加体験型学習など】
★　平和で持続可能な社会の実現に係る学習の重視

【身に付けさせる知識・能力等】
被爆の実相等の事実を捉え、事実を通して未来を志向し、平和で持続可能な社会の形成者として必要な知識・能力
◆　被爆の実相や戦争等に関する知識
◆　課題を解決するための思考力・判断力・表現力
◆　自他を敬愛し、他者とよりよく関わる技能
◆　人や自然を尊重し、世界平和を愛する心情

小学校			中学校			高等学校		
第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	第1学年	第2学年	第3学年	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ

←ヒロシマから学ぶ→　←ヒロシマ・日本・世界から学ぶ→

プログラム1	プログラム2	プログラム3	プログラム4
被爆の実相に触れ、生命の尊さや人間愛に気付く	被爆の実相や復興の過程を理解する	世界平和にかかわる問題を考察する	世界平和の実現を展望する

みんなのたからもの（図、図、道）	みんな生きている（生、道、国）	せんそうがあったころの広島（社、道、道）	広島のひばくと伝えたいこと（社、社、道）	広島市の復興と人びとの願い（道、道、国）	これからの広島（社、社、国）	人々の平和への思い（道、社、国）	広島と世界とのつながり（道、道、国）	持続可能な社会の実現（社、社、国）	ヒロシマ（LHR等）	平和で持続可能な社会について（LHR等）	私たちの平和プロジェクト（LHR等）

自分 → 自分・他者 → 自分・他者 身近な集団 → 自分・他者 身近な集団・社会 → 自分・他者 社会・世界　＜視点の広がりと発展性＞

展　開

被爆体験の確かな継承と平和についての自らの意見や提言等の発信
≪こどもピースサミット≫　≪ひろしま子ども平和の集い≫　≪平和記念式典≫　など

＜資料２＞

平成27年度　教育センター研修　実施要項

区分	研修番号	対象校種					研修日数		受講対象	定員
		幼	小	中	高	特	全日	半日		
申込	56	－	○	○	○	○		2	教職員	30名

平和教育研修（平和教育プログラム実践の充実）

ねらい	「ヒロシマの被爆体験を原点として，生命の尊重と一人一人の人間の尊厳を理解させ，国際平和文化都市の一員として，世界恒久平和の実現に貢献する意欲や態度を育成する」という広島市の平和教育のねらいを理解し，その実践のために必要な力量を高める。

第1日	日時	平成27年6月22日（月）	受付	14:00	会場	川内小学校 広島市安佐南区川内5丁目40番1号　(082)223－3563(教育センター)

	形態	内容	内容の説明
14:30	オリエンテーション		
14:40	講義	広島市の平和教育がめざすもの	平和教育をどのように実践すればよいのか，平和教育プログラムを基軸とした本市の平和教育の基本方針について理解を深めます。
		指導第一課職員	
15:00	授業	平和教育プログラムの実際	平和教育プログラム実践協力校の授業を参観し，本市がめざす平和教育が，実際にどのように学ばれているのか参観します。
		川内小学校　教諭　山田和恵	
15:45	協議	平和教育プログラム実践のポイント	授業の協議を通して，平和教育プログラムを実践する際の工夫点を明らかにします。
		教育センター職員	
16:40	研修のまとめと振り返り		
16:45			

持ってくる物	平和教育プログラム指導資料，ひろしま平和ノート（各種4冊）
注意事項	研修に参加される際に自動車やバイクを利用する場合は，地域の方や登下校中の児童生徒に注意し，安全な運転を心がけてください。

第2日	日時	平成27年9月10日（木）	受付	14:00	会場	教育センター 広島市東区牛田新町一丁目17番1号　(082)223－3563

	形態	内容	内容の説明
14:30	実践発表	平和教育プログラムの実際	平和教育プログラム実践協力校の授業の実践発表を通して，実践のポイントについて考えます。
		早稲田中学校　教諭　柳澤理子，教育センター職員	
15:50	実践交流	平和教育プログラム実践の改善・充実に向けて	各自が自校で取り組んだ平和教育プログラム実践を交流することを通して，平和教育プログラムの実践のポイントについて，理解を深めます。
		早稲田中学校　教諭　柳澤理子，教育センター職員	
16:40	研修のまとめと振り返り		
16:45			

持ってくる物	平和教育プログラム指導資料，ひろしま平和ノート（各種4冊），各自が作成したワークシート
注意事項	研修に参加される際に自動車やバイクを利用する場合は，地域の方や登下校中の児童生徒に注意し，安全な運転を心がけてください。

平成27年度　平和教育研修　1／1

資料3 「平和教育プログラム」における各「学習」「学習」と教科との関わり

プログラム	単元	学習	タイトル	国語	社会	算・数	理科	外・英	音楽	図・美	体育	生活	道徳	特活
プログラム1(小学1～3) 被曝の実相に触れ、生命の尊さや人間愛に気付く	単元1（1学年） みんなのたからもの	学習1：気付く	ぼく・わたしのたからもの～たからものをえにかこう～							○				
		学習2：考える	ぼく・わたしのたからもの～たからものをしょうかいしよう～							○				
		学習3：伝える	金魚がきえた										○	
	単元2（2学年） みんな生きている	学習1：気付く	もっと草花となくよくなろう									○		
		学習2：考える	アオギリ										○	
		学習3：伝える	アオギリさんたちへの手紙	○										
	単元3（3学年） せんそうがあったころの広島	学習1：気付く	子どもたちのくらし～今と昔～		○									
		学習2：考える	家族のきずな										○	
		学習3：伝える	引きさかれる家族										○	
プログラム2(小学4～6) 被爆の実相や復興の過程を理解する	単元4（4学年） 広島のひばくと伝えたいこと	学習1：気付く	フラワーフェスティバルにこめた願い		○									
		学習2：考える	広島のひばくと人びとのくらし		○									
		学習3:発信する	残したいもの・伝えたいこと										○	
	単元5（5学年） 広島市の復興と人びとの願い	学習1：気付く	戦争・原子ばくだんがうばったもの～ひばく者の思い～										○	
		学習2：考える	復興と人びとの願い										○	
		学習3:発信する	復興・発てんのにない手として	○										
	単元6（6学年） これからの広島	学習1：気付く	平和なまちづくり		○									
		学習2：考える	くらしの中の平和		○									
		学習3:発信する	より平和なまちづくりを目指して	○										
プログラム3(中学校) 世界平和にかかわる問題を考察する	単元7（1学年） 人々の平和への思い	学習1：知る	お好み焼きに込められた思い										○	
		学習2:思考する	平和記念都市建設に込められた思い		○									
		学習3：発信する	自分たちの学校や地域社会の平和	○										
	単元8（2学年） 広島と世界とのつながり	学習1：知る	世界に広がっていったサダコと折り鶴										○	
		学習2:思考する	国境を越えた「愛」と「勇気」										○	
		学習3：発信する	平和のためのレシピ										○	
	単元9（3学年） 持続可能な社会の実現	学習1：知る	核兵器をめぐる世界の現状		○									
		学習2:思考する	国際平和に向けての取り組み		○									
		学習3：発信する	平和で持続可能な社会に向けて	○										
プログラム4(高等学校) 世界平和の実現を展望する	単元10 ヒロシマ	学習1：情報整理	平和とは何か											○
		学習2：思考・探求	原子爆弾と被爆の実相											○
		学習3：発信する	被爆体験者が伝えること～中沢啓治さんからのメッセージ～											○
	単元11 平和で持続可能な社会について	学習1：情報整理	核兵器について考える											○
		学習2：思考・探求	ヒロシマに対する人々の思い											○
		学習3：発信する	ヒロシマから国際社会へ											○
	単元12 私たちの平和プロジェクト	学習1：情報整理	平和実現のために自分ができること											○
		学習2：思考・探求	私の平和プロジェクト											○
		学習3：発信する	私の目指す進路と「平和」											○
				5	8					2		1	11	9

・広島市教育委員会学校教育部指導第二課編「広島市立学校『平和教育プログラム』指導資料」（広島市教育委員会学校教育部指導第二課広島市教育委員会学校教育部指導第二課、2014年3月）より作成。

Akita University

【資料４】 小学校　第３学年「学習２」　学習指導案

広島市立川内小学校　教諭　山田　和恵

１．日時　　平成２７年６月２２日（月）６校時（１５時００分～１５時４５分）

２．指導学年　　第３学年５組　（男子 14 名　女子 17 名　計３１名）

３．単元名　　せんそうがあったころの広島

４．単元のねらい

戦争が激しくなった頃の子どもたちのくらしの様子から，厳しい生活の中でも家族が支え合っていくことの大切さを知るとともに，戦争や原子爆弾が尊い命や家族のきずなを一瞬で奪う非人道的なものであることを理解し，平和を大切にしようとする心をもつ。

５．題材名　　家族のきずな《道徳の時間　４－（３）「家族愛」》
「はだしのゲン」からの手紙（1）中沢啓治「はだしのゲン」より

６．本時について

（１）児童の実態

本学級の児童は，これまでの平和学習で，被爆アオギリのことや佐々木貞子さんのことを学んできた。また，平和写真展や絵本「真っ黒なおべんとう」の読み聞かせで，広島の原爆のことについて学習した。今後平和を願い，一人一人が折り鶴を折って，学校の代表児童が平和公園に献納する取り組みを行う予定である。このような取り組みを通して，平和の大切さや命の尊さ，戦争の恐ろしさを学習している。

本学級の児童に「『平和』という言葉を聞いて，イメージすることは何ですか。」と尋ねると，「アオギリ・折り鶴・原爆ドーム・核兵器のない世界・平和公園・・・。」などと答え，これまで学習してきた内容を知識として，よく習得している。次に「現在，平和であるか，そうでないか。」と尋ねると，「平和である」と答えた児童は 31 人中 10 人で「アメリカと日本は，仲良くなっているし，原爆はその後落とされていない。」「戦争は過去のこと。」「折り鶴が平和を象徴しているから。」などを理由にあげて答えた。それに対し，「平和でない」と答えた児童は 31 人中 21 人で「全ての国が戦争をしていないわけでない。」「人との憎しみがある。」「平和の大切さをわかっていない。」などの理由をあげた。したがって，児童は，平和な世の中というイメージや概念を自分の生活のこととして捉えず，切実さに欠けている。また，現代の家族の多くが核家族化しており，大人も子どもも忙しく，家族間の交流が希薄になる傾向がある。

（２）指導について

これまでの平和学習や児童の様子，生活実態から，学習１で学んだ戦時中は，食糧不足で，子どもも大人も常にひもじい思いをしていたという時代背景を十分につかませる。そこで，学習１で学んだ時代背景を，学習２へつなげていけるように，導入時の初めに前時の振り返りを行う。そして，主要発問「進次と二人で，家族に『浪曲』を見せながら，ゲンはどのようなことを思ったでしょうか。」でゲンの気持ちを考える際に，ペアトークを取り入れ，まず，意見の交流を行うことによって積極的にコミュニケーションを図るように仕組む。それから，「浪曲」を家族に見せるゲンの吹き出し部分を考えさせて，ゲンの気持ちにせまることで切実感をもたせる。終末には，苦しい戦争中でも，ゲンのように家族仲良く助け合って生きている家はたくさんあったことや家族のきずなを確認し，学習３「引きさかれた家族」につなげる。

７．本時のねらい

戦争中，家族で助け合い，家族のために自分にできることを懸命に行うゲンの気持ちを考えることを通して，家族の一員として自分にできることをし，協力し合って楽しい家庭をつくろうとする心情を育てる。

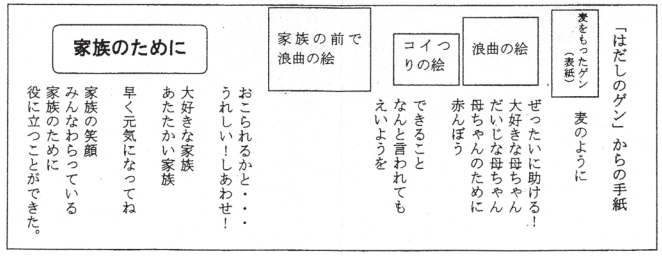
Akita University

8．準備物　　場面絵，学習プリント

9．本時の展開

	主な学習活動・発問（◆）反応例（・）等	支援（◎）と評価（★）【観点・評価方法】
導入	1．前時を振り返る。 2．「麦」について知る。 ◆　ゲンのもっている「麦の穂」を見て，どのようなことを思いますか。 ・はだしのゲンの麦だ。 ・中沢さんのメッセージ「麦になれ」「麦のようにふまれれば，ふまれるほど，強くなる麦になれ。」	◎　学習１で学んだ「はだしのゲン」の時代背景，戦時中は空腹に耐えながら生活していたことを確認するために，児童が前時に書いた「学習をしてわかったこと」を教師が読む。 ◎　前時の学習を想起し，食料を確保するために，麦を育てる家庭もあったことを伝えてから発問する。 ◎　「麦の穂」のイメージを児童に聞いた後，漫画「はだしのゲン」の冒頭の言葉を紹介する。 霜柱をおしのけて冷たい冬に芽をふいた麦は，何回も何回もふまれる。ふまれた麦はたくましい根を大地にはって霜や風雪にたえ，大きくまっすぐにのび，やがてゆたかな穂をみのらせていく。
前段	3．ゲンの気持ちを考えながら，資料「『はだしのゲン』からの手紙（1）」を読む。 4．お母さんが倒れた時のゲンの思いを考える。 ◆　お母さんがたおれた時，ゲンはどのような思いで「浪曲」をしたりコイを取りに行ったりしたのでしょうか。 ・母ちゃんとお腹にいる赤ちゃんを元気にするためにたくさん栄養のある物を食べさせるぞ。 ・食べ物は，そう簡単に手に入らないけど，自分と進次にできることをして，なんとしてでも母ちゃんに栄養のあるものを食べさせるぞ。 ・恥ずかしくったって，怒られたって，なんと言われたって母ちゃんのためだ。母ちゃんを助ける方が大切だ。 5．「浪曲」を家族に見せた時のゲンの気持ちを考える。 進次と二人で，家族に「浪曲」を見せながら，ゲンはどのようなことを思ったでしょうか。 ・学校を休んだり，コイをとったりして悪いことをしたのに，ほめられて安心した。父ちゃん，母ちゃんほめてくれてありがとう。	◎　資料提示の前に，この話が７０年前の広島市の出来事であることと，各自がゲンになって考えることをおさえてから範読する。 ◎　範読では，児童が場面をイメージしやすいようにDVD内にある「はだしのゲン」の場面を映しながら，感情を込めて読む。 ◎　へいわノートに考えを書いてから発表する。 ◎　⑬の家族の表情に注目させるとねらいに迫りやすい。
展開	・みんな元気で笑っていてよかった。 ・母ちゃんと赤ちゃんのためにいいことができた。母ちゃん，早く元気になってね。 ・温かい家族。ぼくはこの家族が大好きだ。 ・今は戦争中で食べ物もなく苦しいけど，家族と一緒なら乗り越えられる。 ・母ちゃん，コイで栄養とって早く元気になってね。 ・家族の役に立ててよかった。家族みんなの笑顔が見られてよかった。	◎　コイを盗むことは悪いことだとわかっているのになぜ取りに行ったのかなど児童の補助発問をしながら，家族を思うゲンの気持ちをしっかり出させたる。その後，父母の思いについて考えさせるのもよい。 父：ゲンは麦のようにたくましくなっている。 母：私のために，うれしい。たのもしい。 ★　家族のために自分にできることを懸命に行うゲンの気持ちを考え，協力し合って楽しい家庭をつくる心地よさを感じ取っている。（記述内容，発表の様子，児童の様子）
後段	6．自分についてふり返る。 ◆　家族のために，どのようなことをどのような気持ちでしていますか。 ・お母さんが病気の時に，早く元気になってほしいと思って皿洗いや洗濯をした。「ありがとう」と言われてうれしかった。 ・お母さんがお仕事で忙しい時に，少しでも休んでほしいと思って，買い物に行った。 ・父さんが仕事で疲れているから，肩をもんであげている。喜んでくれるからうれしい。 ・お小遣いが欲しくて今までしていたな。みんなは家族のためにしているのだな。	◎　すぐに発言するのではなく，先ず，ペアトークや小グループで話し合う時間をとる。 ★　家族の一員として自分にできることをし，協力し合って楽しい家庭をつくろうとする気持ちを感じ取っている。 （発言の内容，児童の様子）
終末	7．教師の説話を聞く。 ・苦しい戦争中でも，きっとゲンのように，家族仲良く助け合って生きている家はたくさんいただろう。	◎　説話の最後は「学習３」へのつながりを意識して語る。 ◎　麦のようにたくましく家族のために一生懸命がんばったゲンの姿から，教師が自分の体験談を話す。

10．板書計画



【資料５】・広島市教育委員会編『小学校１・２・３年　ひろしま　へいわノート～いのち・しぜん・きずな～』（広島市教育委員会、2013年３月）、22-25頁。

学習２　家族のきずな

せんそうがはげしくなったころ、広島の子どもたちは、家族とどのような思いでくらしていたのでしょうか。

この「はだしのゲン」は、広島の原子ばくだんをテーマにしたまんがです。日本だけでなく、世界にも発信されています。
「ゲン」は、作者の中沢啓治さんご自身です。
「ゲン」の家族の話を通して、このころの広島の子どもたちの生活や思いについて考えていきましょう。

（作／中沢啓治氏　提供／広島平和記念資料館）

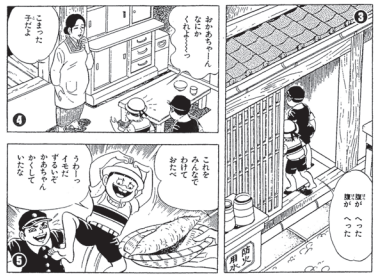
「麦のように強くなれ。」それが父ちゃんの口ぐせだった。

◆「はだしのゲン」からの手紙（１）～まんが「はだしのゲン」より～

1945(昭和20)年。主人公のゲン（中岡元）が小学２年生だったころ、日本は、長いせんそう中だった。兵たいさんにしっかり米を食べてもらって、せんそうに勝つために、ゲンたちは米ひとつぶたりとも自由には食べられなかった。

ゲンと弟の進次は、毎日はらぺこ。「はらがへった。はらがへった。」が二人の口ぐせだった。

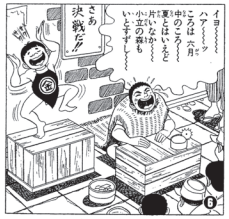
食べものがないので、一つのイモを家族みんなで分けて食べるなんて、あたり前のことだった。



ある時、おなかの中に赤ちゃんのいる母ちゃんが、えいようが足りなくてたおれた。

ゲンは、母ちゃんにおいしいものを食べて元気になってもらいたくて、学校には行かず、毎日町角で進次といっしょに、「ろう曲」のまねごとをした。そして、かせいだお金をこっそりと家に投げこんだ。

また、「コイを食べると元気になる。」と聞くと、二人で近所の庭にしのびこみ、こっそりと池でコイをつったりした。



＊ろう曲：三味線という楽きをばんそうに使って、物語を語るえんげいの一つ。

そして、つったコイを持って、二人が家に帰ってみると…。

Akita University

Akita University

ゲンは、毎日おなかをすかせていた。

けれども、麦のように強く、毎日を生きていた。

そして、どんな時でも、家族といっしょにいるのが何よりも好きだった。

★家族に「ろう曲」を見せながら、ゲンはどのようなことを思ったでしょうか。

24